

小紋潤燃え尽きるまで齋場でかつげえびせん  
つまみに飲めり 六月号・谷岡 亜紀  
わすれずよまたわすれずよ三月の空に満ちみ  
つ亡きひとの息 本田 一弘

星ひとつあんののんと帰りくれば鍵の向か  
うの春の暗闇 塩川 郁子  
気まぐれなキジ猫今日は来なかつた情婦のよ  
うに窓辺に佇む 志水千登世

詩といふは馬のごときかいや牛かそれとも蛇  
か星見えぬ闇 七月号・伊藤 一彦  
知らざあ言つて聞かせやしよう 啖呵切るよ  
うに降りたり五月の雨は  
八月号・森屋めぐみ

初めて作品評を担当した。無選歌欄とそ  
の次の選者二人分の選歌欄（無選歌欄が増  
えた七月号からは一人分）が担当だった。

読みながら良いと思つた歌や気になる歌  
に付箋を貼つた。毎月四十〜五十首位。実  
際に取り上げることが出来るのは、多くて  
二十首だから絞り込むのが大変だった。

一年間に取り上げた作品を並べて、良い  
歌とは何かをあらためて考えてみた。やは  
り歌いたいこと、訴えるものがある歌は胸  
に響く。挽歌を多く取り上げたのはそのせ  
いだらう。子への思いなども含む広義の相  
聞もしかり。読むものの心を揺さぶる歌、  
切なくさせる歌、笑わせる歌、感心させる  
歌。惹きつけるには表現の工夫、面白さも  
大切だ。無駄のない言葉運び、手あかの付

いていない新鮮な比喻等々。そしてつくづ  
く重要だと思ふのが韻律。これがなければ  
「歌」である意味がない。何度も口ずさみ  
記憶に残る「歌」。韻律が大切だ。

無選歌欄はさすがに読み応えがあり、学  
ぶ所が多かつた。中でも青木信の作品は思  
考の深さが感じられ、毎回味わい深かつ  
た。ストリートに読者に訴えかける大口玲  
子、本田一弘。解釈する面白さが味わえる  
谷岡亜紀、奥田亡羊。軽妙な老いの歌の木  
島泉。洒脱な藤島秀憲。小川真理子の五月  
号の連作は抜群に面白かつた。

選歌欄は1/7と2/6の偶然の出会い  
だったが、なぜかよく出会う方、しかも付  
箋を必ずといつていくらい付けてしまふ  
方がいた。福崎享子、村田磨理子、佐世弘

重、井寺容子。多くの新しい出会いがあり、  
心の花の各地の歌人層の厚さを実感した。  
若手では原ナオ。星野さいくる、桜望子に  
刺激を受けた。最後に九月号の作品から。  
・ビルの谷間の雑踏を行く黄昏とき今宵遇  
う人みな貌の無き 伊勢 勇  
・この世にて逢ひし人にも逢へざりし人にも  
逢ひたき 木菟よ来鳴けよ 白岩 裕子  
・こんな日は小さな祈りが届きそう乗り換  
えるたび座れる電車 鈴木 陽美  
・築地正子は築地正子にいつなりし吾は未  
だ河野千絵にあらず 河野 千絵  
・牛飼いがひとり原野をさまよえりたまし  
いのごと牛、馬、犬の 石田 郁男  
・一塊の水片胸の奥に抱き筆しながらゆく  
もう少し 佐藤 亮